



読者へのお願い

あなたはこの本を読まれて、どんな感銘を受けられたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけます。なお、このほかに、カッパ・ブックスではどんな本を読まれたでしょうか。このつぎには、どんな本を読みたいとお考えですか。

この本には、一字でも誤植がないようにと願っておりますので、もしも、お気づきの点がありましたら、あわせてお教えください。お手紙には、ご職業や年齢なども書きそえてくださいませんか。

東京都文京区音羽町三ノ一九

光文社出版局

神吉晴夫

裸足の王国

日本女性アフリカ進駐記

昭和35年11月25日 初版発行

昭和35年12月20日 6版発行

¥ 160

著者

まつもと まりこ
松本真理子
神奈川県横浜市戸塚区矢部町95

発行者

ふくもと あきこ
福本昭子
福岡県福岡市下新川端町28

印刷者

神吉晴夫
大橋貞雄
東京都文京区久堅町108・共同印刷

発行所

東京都文京区音羽町3
振替東京115347

株式会社

光文社

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。

〔小泉製本〕

表紙の模様・意匠登録116613

© Mariko Matumoto & Akiko Fukumoto 1960

裸^{はだ}足^しの王国

—日本女性アフリカ—

福^{ふく}松^{まつ}
本^{もと}本^{もと}
昭^{あき}真^ま理^り
子^こ子^こ
著



まえがき

私たちがエチオピアに行ったのは、昭和三十二年の六月でした。それから約三年間、エチオピアの宮廷に女官として働き、三十五年の五月に帰国しました。

エチオピアから帰ってきたら、会う人ごとに、

「暑いお国で、たいへんだったでしょう。」

と言われます。

「あの国は、大部分が高原で、首都のアジス・アベバは、富士山の六・七合目の高さ。一年じゅう、日本の十月ごろの気候ですよ。」

と答えますと、

「へえ？ アフリカなのに。」

と、びっくりします。

「野蛮人がうようよいて、こわいところでしょう。」

と言う人がいるかと思うと、

「アジス・アベバは、エジプトのカイロなどのような大都会でしょう。」

という人もいます。

そんな質問を聞いたたびに、私たちはびっくりしたり、おかしくなったりしますが、エチオピアへ行くまえの私たちだって、たいした知識はもっていませんでした。

私たち二人が推薦^{すいせん}されてエチオピアに行くことが決まった時、エチオピアがどんな国なのか、出発前にいちおうの知識は持っておきたいと思いました。ところが、エチオピアのことを、くわしく書いた本がぜんぜんないのです。百科辞典のとおりいっぺんな説明だけを読んで、国の地理的位置や、おもな産物が皮革^{ひかく}、コーヒーであることを知るていどで満足するよりしかたがありませんでした。

さて、エチオピアに着いてみると、まず気候の涼しさや、人々の顔立ちの美しさにおどろき、町を歩けば、ボロ服をまとって、裸足^{はだし}で牛を追う男の横を、新型のキャデラックがすりぬけていく極端な対照におどろきました。

私たちは、国賓をお泊^とめするための迎賓館^{げいひんかん}——ジュビリー・パレス——と呼ばれる離宮^{りきゆう}で仕事をしていました。が、宮殿に働く人たちと接し、また、首都やその郊外を見るチャンスが多くなるにつれて、エチオピアという国や、そこに住む人々を、肌で感じることもできるようになりました。それは、百科辞典をいくら精読してもつかみえないものでした。そして、私たちが見たり聞いたりしたままを書いたら、日本のなかには、まだ紹介されていない国エチオピアに興味をもつ

て、読んでくださる人もいらっしゃるかもしれないと思いたって、この本を出すつもりになったのです。

ひとつ残念なのは、私たちがエチオピアの辺地へ行けなかったことです。私たちは探検隊員ではないから、生命の危険をおかす気はありませんでしたし、費用の点でも、とうてい、私たちの手に負えそうもなかったのです。それで、この本の内容は、しぜん私たちの住んでいたアジス・アベバのことが主になってしまいました。

私たちは、この本を書きながら、またエチオピア時代を懐かしく思いだしています。

私たちはまず、エチオピアという遠い未知の国に、娘を旅立たせてくれた親に、感謝しております。

「息子^{むすこ}さんならともかく、娘さんをよく手放しましたね。」

と親たちは、人に会うたびに言われたそうです。世間では、やはりまだ、女の子は家の中に閉じこもっているべきものと思いきこんでいるのでしょうか。私たちのすること、なすことに信用をおいて、海外にまで手放してくれた親たちのことを考えると、元気で帰ってきてよかったという気持ちでいっぱいです。

エチオピアでの私たちは、自由を満喫し、私生活をエンジョイしました。もし私たちが、家庭をもち、夫や子供を日本に残してきたとしたら、こんな別天地に来て、あまり楽しくはなかつ

たでしょう。私たちは、自分自身のことだけを考えていればよかったのです。たとえ死ぬようなことがあっても、落胆らくたんしたり、ひどい迷惑をこうむる人間はほかにいない、と思うと、とても氣楽でした。

また、私たちの生活はだれにも拘束されませんでした。遊んだりしゃべったりで帰宅がおそくなったり、徹夜までしたものです。日曜日は、思うぞんぶん寝坊もしました。二人共有のフォルクスワーゲン（ドイツ製の自動車）を乗りまわして、大事故をおこしたこともあります。なにをしよう、自分で責任さえとれば、私生活では、だれも文句をいう人はいませんでした。それに、私たちは経済的にも楽でした。外国人の月給としては最低でしたが、切りつめなくても、買ったいものを買うことはできました。

しかし、エチオピアでの生活を楽しむことのできた最大の原因は、いっしょに生活した二人の氣が合ったことでしょう。二人とも、向こうみずで氣の強いところが似ていますが、表面にあらわれているものがまったく違っているのです。昭子あきこは、いつもぼんやり、おっとりした表情で、ときどき真面目な顔で冗談じやうだんをいいます。真理子まりこは、ものごとがなんでもキチンと割り切れないと氣がすまなくせに、内心は人一倍ウエット。

真理子は會計係に、昭子は家事係に適していました。私たち二人は、住む家もいっしょなら、仕事もいっしょ、遊ぶのもいっしょ。喧嘩けんかは日課のようにしていましたが、言いたいだけのこと

を言ってしまうと、あとはサッパリ、小一時間とは続きません。そして三年も暮らしていたら、だんだん相手が自分の一部のようになってきた、喧嘩の時には、つぎの相手の言う言葉までが、ちゃんとわかるようになってしまいました。

だから日本に帰ってからも、「私」を主語にした話ができなくて、つい、「私たち」になっってしまうことが多いのです。

「あなたがたは、二人で一人前ですか。」

と、苦笑されたこともあります。私たちも、苦笑するほかありません。そんなわけで、この本も、共著という形になりました。

エチオピアは、未知の国であり、未来の国です。エチオピアは、将来どんな国に発展していくでしょうか。ある人は、こうも言います。

「あの国は、あのままそっと放っておく方が、国のため、国民のためですよ。なまじ『文明』などを導入しようとするのは、不幸のもとですね。」

しかし、歴史の流れにさからうことはできません。

エチオピアは力づくよく前進していくでしょう。エチオピア人の「日焼けした顔」（もともとエチオピアとは「日焼けした顔」という意味です）が、強い太陽をうけて、ますます明かるく輝く日のために。

この本を書くに当たって、資料を提供していただいた在日エチオピア大使館、ご自分で撮影なさった貴重な写真を貸してくださった、もとジュビリー・パレス女官長、片山登代子^{かたやまとよこ}さん、西日本新聞社の先川祐次^{さきかわゆうじ}さん、毎日新聞社の高原富保^{たかはらとみやす}さん、ジュビリー・パレス庭園長、橋本陞^{はしもとのぼる}さん、アジス・アベバ市役所勤務の野原忠雄^{のほらただお}さん、そのほか、いろいろな面でご協力くださったかたがたのご親切を深く感謝しながら。

昭和三十五年十一月一日

松^{まつ} 本^{もと} 真^ま 理^り 子^こ
福^{ふく} 本^{もと} 昭^{あき} 子^こ

目次

まえがき	三
一 未知の宮廷生活へ	三
1 首都アジス・アベバ到着	三
エチオピアからの招き(三) 褐色の美男子たち(六)	
2 かくて女官となる	一九
ガバネス事件(二六) 昼休みが三時間(三三) 掃除監督(三三) 東京都さん(二六) ボーイたちの月給(三三) 初対面の皇帝(三三) 国賓サウド王(三三) 第二ガバネス事件(三六)	
二 皇帝とその周辺	四二
1 ジュビリー・パレスでの仕事	四二
コリンズ氏の忠告(四二) 要領を知る(四三) 蠅のふんでも見える(四四) こわれた鏡台(四八) 水は神様のものです(五二) 重病にこうもりの干物(五三) しろうと医者、大繁昌(五七) 椅子カバーを八百つくる(五九) エチオピアに十三時はない(六三) 赤はA、青はB……(六六) 網ではない、綱だ(七〇) 国賓もかわいそう(七三)	

2 皇室の日常生活……………七六

皇帝は映画がお好き(七六) おさがりはおいしい(八〇) ライオンの名はトージョー(八二) 皇帝の大岡裁き(八五) 日本から男を送れ(九二)

三 常春の都、アジス・アベバ……………九四

とこはる

1 “新しい花”の町と人びと……………九四

日焼けした顔(九四) 胸つき八丁の乗物(九七) 道路と建物(一〇〇) お役人気質(一〇三) まけろ、まけない(一二五) 当たり屋(一二九) 赤線にも皇帝の写真(一二二) 三面記事まで輸入(一二五) 町の清掃人はハイエナ(二二六) 酸素不足で健忘症に(二二九)

2 年中行事と宗教……………一二三

アフリカ大陸の“キリスト教の島”(二三) 一カ月は三十日きっかり(三四) マスカルの祭(三六) ゲンナとテムカット(三九) 二つの記念日(三三) 復活祭のあとに死ぬ人が多い(三四) 病気になるっても肉は食べない(三七) 宮中での宴会(三九) 貸した金は返らない(四二)

四 エチオピア 日焼けした顔の風習……………一四五

1 着ること、住むこと、食べること……………一四五

おいらのタバブ織り(一四四) 美男・美女の標準(一四九) ちり紙はもったいない(一五三) 奇妙な感

賞(一五) 猫に魚をやっちゃ、かわいそう(一五) エチオピア料理の食べ方(一五) 生肉と寄生虫(一六) ダンカリ族の人殺し哲学(一六)

2 ことば・結婚・葬式 一六五

コシヤシヤなお皿(一五) われわれ用の小便紙(一六) 一、二、キッスして。よしてきた(一七) 披露宴を二個所でする(一七) 親どうして結婚契約(一七) 離婚はしごくかんたん(一八) 処女だけが値打ち(一八) 墓掘りに大騒ぎ(一八) ボロ布を着る人々(一九)

五 私たちの見たエチオピア 一九三

1 考えない人と夢見る人 一九三

編みものをする近衛兵(一九) 罰宿直をするボーイ(二〇) 靴下を干して罰金四ドル(二〇) 理論では効果がない(二〇) 月に旗など見えない(二一) 時間はうんとある(二二) 頭のいいドロボー(二三) またもカメラを……(二三) 十五分で判決(二三) 約束はその場かぎり(二四) エチオピア人の夢(二五)

2 さようならエチオピア 二三

かんたんなエチオピアの歴史

エチオピアは、シバの女王の伝説で私たちに親しまれている。三千年ほど前、シバの国のマケダ女王は、ソロモン王の知恵をしたって、パレスチナに出かけた。やがて、シバの国にもどった女王は、ソロモンの子、メネリックを産んだ。このメネリック一世が、エチオピア初代の王といわれている。

この話は伝説にすぎないが、歴代のエチオピア王はソロモンの血筋であることを誇りとし、四世紀にキリスト教が伝えられてからは、その教えを信仰してきた。七世紀に回教がおこってからは、エチオピアもたびたびその侵略を受けた。そのために紅海沿岸の港を失い、外部との連絡を完全に遮断されてしまったが、キリスト教を国教として、守りとおしてきた。こういう閉ざされた状態は、十六世紀半ば、ポルトガル人の協力をえて、回教徒軍を撃退するまでつづく。

エチオピアが国際的舞台にのりだしたのは、十九世紀からである。セオドア王は、ビクトリア女王やナポレオン三世に、一国の王として対等の手紙を出したが相手にされず、白人に恨みを抱いた。ついでイタリアは、紅海沿岸の港を占領し、そのあたり一帯をエリトリアと名づけた。その後もイタリアはなにかエチオピア侵略を計り、一九三六年から五年間は、ついに全土をその手におさめてしまった。その期間、ハイレ・セラシエ皇帝は、やむをえずイギリスに亡命した。第二次大戦後、皇帝の努力の甲斐あって、エリトリアもやっとエチオピア領として認められた。一九五二年のことである。

現皇帝、ハイレ・セラシエ一世は、その二代前のメネリック二世とならんで、名君のほまれ高い。「建国の父」とよばれるメネリック二世が、まず内乱続きの国内を平定して国の統一を計り、ヨーロッパ人を招いてエチオピア近代化にとりかかった。現皇帝は、そのあとをうけて、エチオピア発展のために、一段の努力をされ、今日にいたっている。親日家といわれるハイレ・セラシエ皇帝は、昭和三十一年に訪日された。その返礼として三十五年秋季、日本の皇太子ご夫妻がエチオピアを訪問されている。

一 未知の宮廷生活へ

1 首都アジス・アベバ到着

エチオピアからの招き

一九五七年六月四日、アラビアのアデンをとびたつたエチオピアン・エア・ラインの旅客機に乗って、私たちはエチオピアの首都、アジス・アベバに近づいていった。飛行機は、眼下の山々をけおとすように上昇していく。揺れかたがいっそうひどくなつて、胸がむかつく。山岳地帯であるうえに、雨期にはいりかけているので、とくにひどく揺れるのだそうだ。

「アジス・アベバまで、まだ、どのぐらいかかるのでしょうか。」



エチオピア人が羊皮紙に書いた絵。19世紀の名君セオドア皇帝をたたえたもの。

吐氣^{はきけ}が強まってくるので、たまりかねてスチュワーズにきいてみた。

「あと十分ほんです。」

早くついてしまいたい。「十分」、「十分」と心の中でつぶやきながら目をつぶる。

——この年、昭和三十二年の二月のある日、まだ東京女子大学の四年に在学していた私たちが、光明先生^{こうみょう}と天達先生^{あまたつ}とに呼びだされて、

「遠い国——アフリカのエチオピアに行ってみませんか？」

と話されたときは、さすがに驚いた。よく事情をきくと、前年の三十一年秋に、日本へおいでになったエチオピアのハイレ・セラシエ皇帝が、すっかり日本をお氣にいられて、こんどエチオピアの政府と宮殿に日本人を雇い入れるため、わざわざ特使をお遣^{つか}わしになったというのである。

軍事・経済など政府に必要な顧問を数名、庭師、医者、マッサージ師各一名、それに、皇孫のご養育係を三名捜していらっしゃるとのこと。ご養育係三名のうち、その長に当たる年配のかたには、当時ガール・スカウトで働いておられた片山登代子^{かたやまとよこ}さんが、内定していて、その下で働く人を二人、ほしいのだ、とか。私たちは、

「じゃあ行かせてください。」

と、格別のことも思わないで、この先生の話をお受けした。

学生数のすくない東京女子大学ではあるが、英米文学科の松本真理子^{まつもとまりこ}と、社会科学科の福本昭^{ふくもとあき}

子とは、エチオピア行きの話があるまでは、おたがい一面識もなかった。先生にはじめて引きあわされた時も、おたがいに相棒となる人を、「真理子さんというのは気の強そうな人だ。」「昭子さんというのは、ぼやーっとした人だ。」と思いながら眺めていた。手続きや買物など、出国のための準備を二人で相談しながらやり始めると、性格がまるで反対のせいかな、このコンビはなんとかしっくりいきそうに思えた。

「エチオピアがどんなところだか、さっぱり見当がつかないけれど、家と三食つきで月給は一人五万七千円もくれるというし、日本の公使館も向こうにはあるというから、とにかく行けばなんとかなるでしょうよ。」

ぐらいの気分で、六月一日、羽田^{はねだ}から出発した。

私たちは、生まれてはじめて飛行機というものに乗ったことが、もう嬉しくって楽しくって、まるで修学旅行に出かける時のように大はしゃぎだった。

「どうして先生がたはあなたと私の二人を選んで推薦なさったのかしら？」

「さあ、きっと条件の揃っている人を消していったら二人だけ残っちゃったのよ。第一に、ずばぬけて成績のよかった人は、大学院に行ったり留学したり、でしょう。つぎに、優等生はとくにいいところへ就職口が決まっているし、きれいな人はさっさと永久就職するし……。」

「なるほど、成績は悪く、きりようも悪く、しかも身体強健でめめめしない、およそ大和^{やまと}なで